にっぽんの100人の青年 80

3年間被災地に通い続ける元不良少年

山川雄三さん

（ダイニングバー「ティエンダ」代表）

かつて不良少年だった青年は、高校卒業後の渡米を機に自らを見つめ直し、飲食店開業後に経験した火事により人の温情に触れた。東日本大震災発生以来の3年間、そうした経験が、被災者への物資の配布や漁業者の支援のため、青年の足を埼玉から南三陸町へ毎月向かわせ続ける。

林えり子 作家
写真・田渕睦深

2011年3月11日の1カ月後、山川雄三さん（35歳）は、大地震と大津波に襲われた東日本大震災の被災地、宮城県本吉郡南三陸町志津川の地を踏んだ。

南三陸の見晴るかす紺碧の大海原は美しく、道すがらの被害の物凄さに愕然とした目が洗われるようだった。しかし、波が打ち寄せる入江には、家屋の屋根や車がおびただしい数で、浮き輪のように浮かんでいた。海岸から陸地、奥地へと人々の暮らしがあった一帯は、映画で見た銃弾爆撃地のような光景だ。所々に木切れが何本も杭打ちされていた。先端に手袋や衣服の切れ端がひらめいている。亡くなった人の亡骸のありかを教えているのだ。

ことばを失い、震えそうになる足を辛うじて踏んばらせ、山川青年は心に誓った。自分にどれだけのことができるかわからないが、この地へ通い続け、被災した人たちと共に再生の足がかりを見出そう。

彼が運転する3トン車の荷台には、さまざまな日用品が積まれていた。トイレットペーパー、紙オムツ、生理用品、往復に必要なガソリンのタンクもある。

被災した人たちが身を寄せる施設へ着くと、物品の各種を1所帯分ずつビニール袋に小分けし、すぐに使えるように手渡した。

ここまでの準備に1カ月を費やした。店で義援金を募ると、あっという間に40万円が集まった。善意の結晶は100%被災地に還元しなくてはならない。赤十字社とかへ託してもいいが、どのように使われているかが目に見えないもどかしさがあった。物に換えて、直接手渡すのが最良と考えた。

問題はそれをどこに届けるかだ。思い悩みながら、近くのスナックへ行き、ふと、口にすると、だったら、私のふるさとへ行ってくれないかと、カウンター越しに言われた。山川青年と同い年の息子を持つ店のママが南三陸町志津川の出身だったのだ。

「心配でたまらないけど、体が弱いから行けない。私の代わりに、って」

山川青年と志津川の縁がこうして結ばれた。

店内の大きな黒板には、南三陸町産の海産物を使ったメニューが並ぶ

以来「月1度」のペースで志津川を訪ね、2泊3泊を目安にボランティア活動をしている。

山川青年は、ダイニングバーのオーナーである。20歳の若さで開業、15年経った現在、2号店を構えての年間売り上げが5000万円に達したといい、将来的には3店舗目として、仕出し屋かあるいは居酒屋にしようかと構想を練っている。

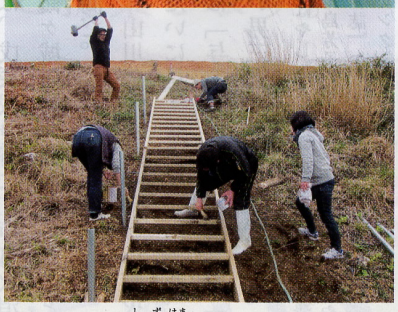
1号店は埼玉県南西部に位置する飯能市、西武池袋線飯能駅前の繁華街の裏通り、スナックや居酒屋、バーが居並ぶ街筋にあった。屋号は「ティエンダ」、スペイン語で「店」という意味で、「この名前なら、商売内容を変えても店名を変える必要はないですし」と、笑顔を向けた。

背は180センチを優に超え、日本人離れした容貌である。笑顔を絶やさないのは、強面を和らげようとの思いがあってのことかもしれない。山川青年は小さい頃から「見た目」で損をしてきた。大きな体躯が威圧感みたいなものを与えたのだろう。腕力もあった。学校や近所で何か事が起こると必ず「あの子がやった」と名指しされた。

「濡れ衣を着せられているうちに、だったらほんとうに俺がやってやろうじゃないかってグレだした。スキンヘッドにしたので周りも目を背けました」

〝悪ぶる〟のもいつか退屈するわけで、高校3年になると飯能市街の飲食店でアルバイト。ここでオーナーシェフの包丁捌きと調理を盗み見しながら覚え、これが後に生きてくる。思えば6歳の頃には親戚の洋食屋店主のおじさんがかっこよくて、料理に興味を持った。

「バイト代はほとんど使わずに貯金。辞める時50万円ありました。それを旅費に高校卒業後、米国へ友人2人と渡


上・南三陸町清水浜（しずはま）沖でタコかご漁を手伝う山川さん　下・南三陸町で避難道を設置する山川さんはじめボランティアの皆さん（提供・山川雄三さん）

航、その後は独りで列車で旅しました」

当時流行していたヒップホップを現地で実際に見聞きしたかったのだが、1カ月、2カ月と過ぎるうちに、己を客観視している自分を見出していた。いうならターニングポイントだった。一皮むけて帰国、デパートに就職し、生まれて初めて〝ふつうの人間関係〟を経験した、という。

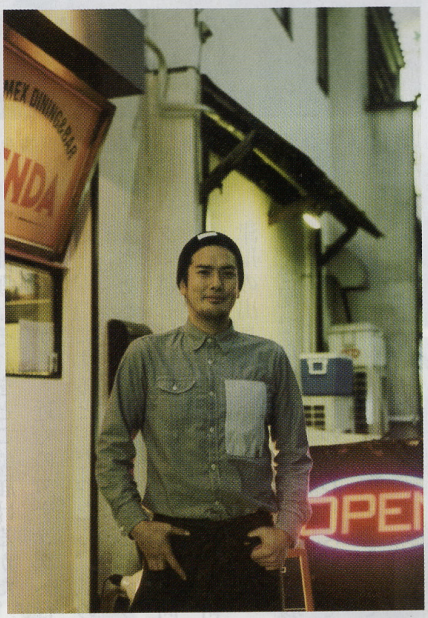
山川さんの実家は葉茶屋（はちゃや）。祖父の代に創業、製造から販売までを手がけ、小売店は「ティエンダ」の隣にある。両親は品行よろしくない長男にやきもきするが、いつか立ち直ると信じていたのだろう。実家の所有する空き店舗を使ってもいい、資金200万円を貸すから生産性のある使い方をしろ、と言ってくれた。

「甘い父親ですよね、でもありがたかった――」

かくしてメキシコ風アメリカンスタイルの料理を供するダイニングバーを開店する。ところが、世間の目はおいそれとは変わらない。相変わらずの白眼視が付いて回る。

「俺は以前の俺じゃない。真っ当な人間として店をやっているんだ。親に借りたものはきちんと返済している。家賃だって払っている。だのに、なんだ。なにくそってがむしゃらに働きました――」

だから、店は繁盛した。



「ティエンダ」の前に立つ山川さん

火事をきっかけに知った人の情のありがたさ

そうして3年経ったある夜、閉店後の店が煙草の吸殻の不始末で出火。母親からの電話で急ぎ駆けつけると、店主より先に火事跡にやってきた人たちが何人もいた。いても立ってもいられず、消火中というのに山川青年が飛び込むも、煙に阻まれるという有様。でも、発見通報の速さが〝ボヤ〟で済ませた。

翌朝、片付けに行くと、なんと、常連客が焼け屑を拾い集めたり片付けたりしていた。涙する女性もいた。

「嫌われ者の若造にあったかい心を寄せてくれるなんて信じられませんでした。ありがたくって、泣きました。うちに来てくれているのは、単なる飲み食いだけが目的じゃなかった――」

心の拠りどころ、そんな気持ちが常連のお客さんたちにあったのだと考えると、仕事だ商売だとやってきたことに反省と後悔がわき上がってきた。彼をして被災地ボランティアに行かせたのは、この日に受けた人の情のありがたさからだった。

南三陸に3年間通い続け、支援物資を仮設住宅に配布するほか、高台への避難道設置の土木工事や懇意になった漁業者の船に乗り込んで沖まで行き、養殖ワカメの収穫を手伝うなど支援活動の内容は広がっている。

「街灯がなく物騒ですから、仮設の街灯を買い、設置しています」

現地での支援以外でも被災者サポートとして南三陸の魚介類を東京や埼玉の人たちに販売する支援バザーに何度か参加し、最も身近なところでは自身の店で現地の魚介類を扱い、「天然ブリのポワレ」「極上鮭のアクアパッツァ」「真鱈のコブ締め」が人気。

かつて江戸市中には5千を数える「講」が市民たちによってつくられた。その一つが「なまず講」。地震災害支援の市民互助組織だ。彼らが江戸市中だけでなく他藩支援も行ったと思うのは、戊辰戦争時に江戸町火消衆が会津鶴ヶ城の防戦に出向いたことからの推測だ。

山川さんが威勢のいい町火消の頭（かしら）みたいに見える瞬間があった。江戸っ子は「与力、火消、相撲」を「江戸のいい男三人衆」に挙げている。Ⓦ

（はやし・えりこ）作家。著書に『清朝十四王女川島芳子の生涯』（ウェッジ文庫）や『暮しの昭和誌』（海竜社）、『江戸・東京通物語』（ソフトバンククリエイティブ）等がある

ボランティアによる支援は依然不可欠

宮城県本吉郡南三陸町は、2011年3月11日の東日本大震災で発生した大津波による被害が甚大で、町の62%（市街地で75%）もの家屋が損壊した。

3年を迎えようとしている現在では、市街地の基礎は撤去され、高台移転の造成が始まりつつあるが、まだまだ人の手を必要としているものがあるという。ワカメをはじめとする養殖漁業の支援、農地復旧をはじめとする農業支援などは機械ではできない作業が求められている。

それらのニーズに応えるためには、より多くのボランティアによる支援が不可欠とのことである。（南三陸町災害ボランティアセンターHPより）

宮城県内（主に沿岸部）の市区町村災害ボランティアセンターにおけるボランティア活動数の推移を見ると、11年度に約526,000人、12年度に約99,000人、13年度は11月までで約45,000人となっている。（宮城県災害・被災地社協等復興支援ボランティアセンターHPより）より多くの参加が不可欠な状況に対し、年ごとにボランティアの参加数が減っているのが実態である。